

アーサー・コナン・ドイル作
伊豆野 良江訳

クランバー館の怪異

The Mystery of Cloomber, by Arther Conan Doyle, Translated by Yoshie Izuno

第十二章 三人の仏僧

目が覚めたのは、十一時か十二時頃だっただろうか。金色の光の洪水の中にいると、昨晩の恐ろしい出来事は一夜の夢のように思えてくる。窓に絡まるツタの葉を優しくなでている風が、ほんの数時間前はこの家を激しく揺さぶっていたとは、信じられなかった。まるで自然が怒りに身を任せて乱暴を働いたことを悔いて、その償いに陽光を注ぎ、温かい微風を送っているかのようなだった。庭には、自然に感謝しそれをたたえる小鳥たちの歌声が満ちていた。

わたしがホールに下りていくと、難破船の乗組員たちは口々に礼の言葉を述べた。ぐっすり睡眠をとったせいで、皆すっかり回復したように見えた。ウィグタンまでは馬車、そこからグラスゴーまでは夜汽車で、全員を送り届ける手はずを済ませた。その上、父はサンドイッチと固ゆで卵の弁当を持たせるよう指示したのだった。

メドーズ船長は、船主に代わってわたしたちの手厚いもてなしに心から感謝の言葉を述べると、音頭を取って船員一同と万歳を三唱した。朝食後、船長と航海士はわたしたちと一緒に遭難した現場を見に行った。

湾内の波はまだ高く、激しく岩に飛沫を散らしてはいたが、昨夜のすさまじさはどこにもない。エメラルド色の波が、わずかに白く泡立ちながら悠然とうねっては、一定のリズムで碎け散る様子。まるで疲れ切った怪物がのたうっているようだ。

海岸から二百ヤードほど沖合に、バーク船のメインマストが見える。時々波間に没して見えなくなるが、また大波が来ると、巨大な投げ槍のように天空に放り出されては、水滴を光らせていた。他にも難破船の破片が数多く漂っていたが、砂の上にも無数に帆柱や積荷があった。小作人たちが引きあげて、波にさらわれない場所に置いたらしい。ふと、二羽のカモメが翼を大きく広げて、難破した付近を低く旋回するのに気がついた。海の底に何か不思議なものでも見つけたのだろうか。時々、目にしたものを話し合うかのように、耳障りな声で鳴きかわしている。

「おんぼろ船だね、水漏れがしていましたよ」船長は海を見ながら、悲しそうに言っ

た。「それでも、一緒に航海した船の最期を見るのは、つらいですな。いずれ、解体されて薪になるしかなかったでしょうがね」

「穏やかですね。昨晚、この海で三人の命が失われたなんて信じられませんよ」わたしは言った。

「お気の毒に」船長はしんみりと言った。「万一、わたしたちの発った後に遺体が打ち上げられるようなことがあったら、ウエストさん、どうか手厚く埋葬してください」わたしが答えようとしたとき、突然航海士が腿をたたいて大笑いを始め、その挙句むせかえりながらこう言った。

「埋葬するんなら、急がないと逃げられちまいますよ。昨晚あつしが言ったこと覚えておいででしょ？ あの砂山の上をご覧になれば、その話が嘘じゃないことがわかりますよ」

海岸沿いの少し先に小高い砂丘があったが、その上に人影があった。船長はその姿を見ると、ひどく驚いて叫んだ。

「ややつ！信じられん、ラム・シンじゃないか！行ってみよう」

そう言うのが早いか、夢中で駆け出した船長の後を、航海士とわたしは追いかけた。また、漁師数人も何事かとそれに続いた。

その男はわたしたちが近づくと見ると、砂山から下りて、思索にふけっているように首を垂れて静かに歩んできた。

あたふたと騒々しく駆けつけた我々に比べ、その東洋人はなんと重々しく気品があったことだろう。落ち着き払った思慮深げな茶色の目を上げ、頭を下げて丁寧なお辞儀をしたのを見たとき、自分たちを教師の前に出た小学生のように感じずにはいられなかった。

そのすつきりした広い額、心を見透かすような澄んだまなざし、引きしまった繊細な口元、決然とした表情。これほど気高く威厳のある人物をわたしは知らない。そしてこれほどまでに冷静沈着で、自分の秘めた力を意識した顔というものがあるだろうか。

東洋人は、茶色のビロードの上着にゆったりした黒っぽいズボンを身につけていた。襟ぐりのあいたシャツからたくましい褐色の首が見え、頭には昨夜見た赤いトルコ帽をかぶっている。

近づいてみると、驚くことに服にはまったく水にぬれた跡もなく、きれいなままだった。海に投げ出されて岸まで泳げば、見る影もなくなるはずなのに。

「やあ、御無事でしたか」東洋人は船長から航海士に視線を移しながら、音楽のように心地よい声で言った。「他の船員の方々も御無事だいいのですが」

「皆助かりましたよ」船長が答えた。「あなた方のことはもう諦めていました。今もこちらのウエストさんと埋葬の話をしていたところです」

彼はわたしを見てほえんだ。

「まだしばらくは、御厄介にならないですむと思います。他の二人も無事に岸に着きま

した。海岸の一、二マイル先にある小屋で避難していました。寂しい場所でしたが、自由はありません」

「午後三時ごろに行くつもりですが、一緒にしませんか。英国が初めてでしたら、あなたがただけでは何かと不便でしょうから」船長が言った。

「親切はありがたいのですが、どうぞ心配なく。せっかくここに流れ着いたので、すから、もう少し見て回りたいのです」

「それなら無理には言いませんが」船長は肩をすくめた。「こんな片田舎には見るものなどなさそうですがね」

「確かにそうかもしれませんが」ラム・シンは愉快そうにほほえんだ。「でも、ミルトンの詩にありますよね」

心というものは独自の世界である

そこでは地獄を天国にも

天国を地獄にも変容させることが可能だ

「二、三日はここで楽しく過ごすつもりです。ここを片田舎だというのは、違うと思いますよ。わたしの間違いでなければ、こちらのお若い方のお父上はジェームズ・ハンター・ウエスト氏ではありませんか。その名はインドの学者によく知られ、尊敬されています」

「おっしゃるとおり、父は有名なサンスクリット学者です」わたしは驚いて言った。ラム・シンはゆっくりと話し出した。「そういう方がいらしゃれば、ここは田舎でなく都市なのです。レンガやモルタルの建物よりも、偉大な精神こそが文化なのです。お父上は、東洋学者のウィリアム・ジョーンズやハンマープルクシュタル男爵の域には達していないまでも、二人の優れたところを多く備えておいでだ。ただ、サモエド語とタミル語の語源研究においては、誤りが見られます。お父上にそうお伝え願えますか？」

「二、三日にいらつしゃるなら、ぜひ家においでください。父はどんなに喜ぶことでしょう。父はここで地主の代理をしております。スコットランドの慣習では、教区に來られた名士の皆さんをおもてなしするのは、地主の特権なのです」

航海士がわたしの袖を引っばっているのはわかっていたが、構わずこう言った。しかし、結局その心配は無用だった。ラム・シンはその申し出は受けられないというように首を振った。

「我々一同、大変感謝いたします。しかし、ここに残るにはそれなりの理由があるのです。現在いるのは朽ち果てたぼろ小屋ですが、我々東洋人は、ヨーロッパ人ほど物がなくても生活できるよう訓練されています。富む者とは、所有するもの多さではなく、不必要とするもの多さで決まるといふ格言があるくらいです。親切な漁師がパン

や香草をくれましたし、寢床には乾いたきれいな藁があります。それ以上何がいるでしょうか」

「でも、暑い所から来られたのだから夜分は寒いでしょうね」船長が言った。

「体が冷えることはあるかもしれませんが、それを感じないのです。我々は皆、ヒマラヤの万年雪に覆われた高地で長年修業を積んでいますので、これくらいなんともありませんよ」

「では、せめて肉や魚をお届けしましょう」わたしは言った。

「我々はキリスト教徒ではなく、位の高い仏教徒です。おのれの肉体を肥やすために牛や魚を殺生する権利は人間にはないと、我々は考えています。生き物に命を与えたのは人間ではないので、みだりにそれを奪うこと許されていません。せつかくですが、それを食することはできないのです」

「ですが、こんな天気の不順な荒地で栄養をとらないと体が弱って、そのうち死んでしまいますよ」

「それなら死ぬまでです」ラム・シンはにっこり笑った。「では、そろそろお別れしなければなりません。船長、航海中はお世話になりました。それから航海士さん、あなたは今年中に船長におなりになりますよ。ウェストさんにはここを去る前にもう一度お会いするでしょう。それでは皆さん、さようなら！」

彼は赤いトルコ帽を脱いでお辞儀をしてから、もと来た方に帰って行ったが、すべてのしぐさが気品にあふれ、威厳に満ちていた。

「おめでとぅ、ホーキンス君」船長は帰る途中で言った。「今年中に自分の船が持てるみたいじゃないか」

「そんなにつましくもんですか」そう言いながらも、航海士の赤褐色の顔はほころんだ。「先のごとはわかりませんがね。ウェストさんはあの男をどう思いますか」

「大変興味をひかれました。若いのに思慮深く態度も堂々としています。三十はいいと思いますよね？」

「四十ですよ」航海士が言った。

「少なくとも六十だ」船長が言った。「第一次アフガン戦争を体験したような口ぶりだった。そのとき二十歳だったとしても、四十年前だからな」

「信じられない！」わたしは叫んだ。「肌や目なんか、わたしと同じくらいの方にしか見えないじゃないですか。きつと三人の中で一番位の高い僧でしょう」

「それが、一番下なのですよ」船長はきっぱりと言った。「だから、彼が二人に代わってわたしたちと話をしているんです。他の僧たちはあまりに偉くて、俗っぽいおしゃべりなどできないというわけですな」

「今までこんな不思議な漂流物が流れ着いたことはなかったでしょうね。父はひどく興味をそそられるに違いありません」

「しかし、あの連中に関わらない方が身のためですぜ」航海士が言った。「あつしが

船長なら、絶対にああいう手合いは乗せませんがね。おっと、出帆の時間だ。いよいよお別れですね」

家に戻ると、ちょうど馬車に荷物を積み終え、船員も全員乗り込んだところだった。二人は御者の両側の席に急いで飛び乗った。一斉に別れの言葉を言う船員たちを乗せ、馬車はウイグタン停車場目指して動き出した。わたしは父やエスターとともに芝生に立って、馬車がクルンバーの森に消えるまで手を振り続けた。こうして、船も船員もわたしたちの小さな世界から跡形もなく消えてしまった。唯一残ったものといえば、ロイド保険会社の人間が来るのを待っている砂浜の船の残骸だけだった。